

氏名	島澤ゆい
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲 第63号
学位授与の日付	2016年3月18日
学位授与の要件	学位規則 第4条第1項 該当
学位論文の題名	「育児ストレスに影響を与える要因に関する研究」 副題:母親のパーソナリティの観点からの考察
学位審査委員	主査 渡辺 恭子 副査 川瀬 正裕 副査 宗方 比佐子

論文内容の要旨

本論文は育児ストレスの要因について母親のパーソナリティの観点から考察している。本論文は理論編の第1章から第3章・実践編の第1章から第3章・総括という構成となっている。

理論編の第1章「育児不安と育児ストレスに関する先行研究」では、国内外の育児ストレス研究の推移について検討している。さらに、先行研究を、厚生労働省が虐待の要因としてあげている「保護者側の要因」「子ども側の要因」「養育環境の要因」の3つの観点から考察している。その結果、それぞれの要因に母親のもつ要素が関係していることが明らかとなったと述べている。そして、母親側の要素の中でも、特にパーソナリティ傾向が育児ストレスと密接に関わっているのではないかとの考察を得ている。

理論編の第2章「パーソナリティとストレスに関する先行研究」では、パーソナリティ傾向とストレスの関連について、どのようなパーソナリティ傾向が育児ストレスに関連するか、先行研究をもとに検討している。その結果、母親の自己状態や自尊感情、自己効力感に着目した研究があることが確認されたとの結論を導き出している。加えて、先行研究において母性意識と育児ストレスの関連についても散見されたため、母親のパーソナリティ、母性意識、育児ストレスの関係を検討する必要があるとしている。

理論編の第3章「母親へのサポートと育児ストレスに関する先行研究」では、母親のサポートや育児ストレスの軽減について、先行研究をもとに具体的な支援について論じている。その結果から、島澤氏は、育児ストレスに対するサポートの一つとして音楽活動を用いることでリラックス効果が得られると考察している。しかし、本邦の先行研究

では、特に量的研究において、その対象が育児中の母親に限定されたものがないことから、対象者を育児中の母親に限定して検討する必要があるとの結論に至っている。

上記の理論編の考察から、育児ストレスの要因として、母親のパーソナリティが育児ストレスに関連しており、母親のパーソナリティ、母性意識、育児ストレスの関係を検討する必要があると述べている。また、島澤氏は母親へのサポートとしてリラックスすることが育児ストレスの軽減に有効であると推察し、音楽を用いることで母親のストレスを緩和出来ると考えている。そこで、本論文では、第1に、母性意識と母親のパーソナリティやサポートとの関係を探ること、第2に、母親のパーソナリティ、母性意識、育児ストレスの関連について探ること、第3に、母親がリラックスできるとされる音楽について、育児中の母親への効果を探ることを目的に、実践編において研究を行っている。

実践編の第1章「第1研究—育児ストレスの要因に関する質的研究」では、島澤氏は母親のパーソナリティは他の要素とどのように関係するのか、また、母性意識がどのように形成されるかについて探ることで、育児ストレスの具体的な要因が明らかとなると考えている。そして、母親のパーソナリティは母性意識や育児におけるサポートとどのような関係があるのか、出産・育児を経ることによって母性意識がどのように経時的に変化していくのか質的に検討することを目的として本研究を行っている。調査期間は201X年2月から8月の7か月間で、研究対象者は、0歳から3歳の子どもをもつ母親10名である。経時的変化を質的に検証するため、母親の妊娠・出産・育児における子どもや自分自身、生活環境の変化などに関する半構造化面接を実施し、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる検討を行っている。そして、インタビュー内容の分析から、24個の概念、13個のサブカテゴリー、7個のカテゴリー、3個のコアカテゴリーが抽出されている。さらに、事例AからJの回答を検討し、それぞれのカテゴリー間の関係について考察している。その結果、母親のパーソナリティ・子どもに対する感情・母性といった要素が相互に関係するとしている。また、島澤氏は母性の形成は子どもに対するポジティブな感情からの影響があるだけでなく、母親のパーソナリティが育児を通して変化することで経時的に母性が形成されていくと述べている。一方、一般的に育児ストレスの要因としてあげられているサポート不足は、本研究の事例では母親のパーソナリティと関係が認められなかったが、周囲からのサポートは子どもに対するポジティブ・ネガティブ感情と関係し、それらの感情が出産後のパーソナリティ変化や母性形成と関係していくと推察している。

実践編の第2章「第2研究—育児ストレスとパーソナリティの関連」では、先行研究

でも取り上げられている自我状態の AC・FC、自尊感情、自己効力感、母性意識、育児ストレスの関連について包括的に検討している。調査期間は 201X 年 6 月から 201X 年 2 月の 9 か月間で、研究対象者は B 市・C 市保健センター・D 市保健所の健診及び育児教室へ参加した母親 159 名である。質問紙は、TEG II (AC と FC のみ使用)・GSES・自尊感情尺度・母性意識尺度・育児ストレス尺度を実施している。分析方法は、母親の自我状態・自尊感情・自己効力感・母性意識・育児ストレスの関連性を検討するためパス解析を行っている。パス解析の結果、「自尊感情」から「AC」と「MN」へ負の有意なパスが認められている。また、「自尊感情」から「FC」と「MP」へ正の有意なパスが認められ、「FC」から「MP」へ正の有意なパスが認められている。さらに、「GSES」から「AC」と「MN」へ、「AC」と「MN」から「育児ストレス」へ有意なパスが認められている。以上の結果から、自尊感情は、順応した子どもの自我状態である AC や消極的・否定的母性意識というネガティブな感情の低下に影響すると考察している。一方、自尊感情・FC・MP の関係性について、自尊感情は、積極的・肯定的母性意識に直接影響するだけでなく、FC という自由な子どもの自我状態を介することで、母性意識をより高めると述べている。加えて、「MN」から「育児ストレス」へ正の有意なパスが認められ、否定的な母性意識が育児ストレスを高めることが示されたとしている。

実践編の第 3 章「第 3 研究—音楽活動による育児ストレスの変化」では、育児ストレスに対するサポートとして、リラックス効果の期待できる「音楽」を取り上げている。具体的には、心理学的指標を用いて気分の変化を検証することで、ストレス緩和に有用であるとされる音楽活動が、育児ストレスを問題とする母親の気分改善に有効であるかを検討している。調査は、201X 年 9 月に実施し、研究対象者は E 市幼稚園に通う母親とその子ども 12 組である。質問紙は、フェイススケール、TEG II (FC・AC のみ使用)、POMS (Profile of Mood States) 短縮版、音楽活動に関する感想を用いたものを配布している。音楽活動前後における POMS の変化を検討するため、「1. POMS の回答、2. 10 分程度の音楽活動、3. POMS の回答」という手順で回答をしてもらい、t 検定による分析を行っている。さらに、TEG II の AC と FC に着目し、パーソナリティと音楽活動による気分変化の関係について事例を取り上げている。その結果、音楽活動前後の POMS の得点について、緊張—不安を示す「T-A」、怒り—敵意を示す「A-H」、疲労を示す「F」、総合得点の TMD において有意な差が認められた。この結果から、対象を育児中の母親に限定した場合でも音楽活動による気分改善効果が確認されたとしている。さらに、事例の検討から、「AC が低すぎず FC が高い」というパーソナリティ傾向の母親が音楽活動による気分改善効果をより得られると考察し、音楽活動による育児ストレス軽減の介入

においては、AC と FC のよりよいバランスを保つようにすることが重要であるとしている。

総括編では、理論編・実践編の結果と考察を踏まえ、総合的な考察をしている。その結果、母親のパーソナリティ・母性意識・育児ストレスの関係について、母性と子どもや育児に対する感情は、母親のパーソナリティを軸に関係するとの結論を得ている。また、自尊感情は、AC や消極的・否定的母性意識というネガティブな感情の低下に影響すると考えられることから、自尊感情を強化することで AC のネガティブな部分を抑制することが重要であると述べている。加えて、自尊感情は、積極的・肯定的母性意識に直接影響するだけでなく、FC という自由な子どもの自我状態を介することで、肯定的な母性意識をより高めると述べている。これらの結果から、自尊感情・自我状態というパーソナリティに加え、育児により変化すると考えられる母性意識の3つの要素が相互に影響を与え関係性をもつと結論づけている。さらに、リラックス効果があるとされる音楽は、育児中の母親を対象とした場合でも有効であることが確認されたと述べられている。そして、「AC が低すぎず FC が高い」というパーソナリティが、音楽活動による気分改善効果をより得られると推察している。

審査結果の要旨

1. 予備審査

2015年11月11日、16:30から18:00まで行われた。

予備審査においては、先行研究について一覧表を作成すること、自尊心と自己効力感をパス図のどの位置に配するのかについて仮説モデルを再度検証すること、実践編第3章において事例として取り上げた根拠を明示することなどの指摘がなされた。

2. 本審査

2016年1月27日、13:20～15:00まで行われた。

審査では、本論文の理論編は、育児ストレスの理論的背景について先行研究を様々な観点から検討しており、高く評価できるとの結論を得た。具体的には第1章で育児ストレス研究の動向、第2章でパーソナリティとストレスに関する先行研究、第3章で母親へのサポートに関する先行研究の動向を探っている。その結果、母親のパーソナリティと育児ストレスの関連が明らかにされている。

さらに、理論編を踏まえて、実践編では育児ストレスに影響を与える要因を検討すべく調査等が行われている。これらの調査は、実際の検診などにおいて、育児中の母

親本人を対象としており、研究の妥当性が高いと評価された。具体的には、第1章では、母親のパーソナリティと他の要素との関係・母性意識の形成を明らかにすべく、10名の母親に半構造化面接を実施し、グラウンデッドアプローチ法によって質的研究を行っている。第2章では、159名の母親を対象に調査を行い、母親の自我状態・自尊感情・自己効力感・母性意識・育児ストレスの関連をパス解析によって量的に検討している。これらから、自尊感情は自我状態の順応した子供(AC)や否定的母性意識を低下させることが明らかになっている。また、ACは育児ストレスとも関連し、自尊感情を高めことで育児ストレスを低減させる可能性が示唆されている。また、自尊感情は自我状態の自由な子供(FC)を介して肯定的母性意識を高めるとされている。これらの要因の関連について包括的に検討した量的研究は本邦には見当たらず、オリジナリティが高いと評価された。さらに、第3章では母親のリラックスを促す方法として音楽活動を取り上げ、12組の親子を対象に量的に研究するとともに事例も検討している。その結果、音楽活動による気分改善効果が認められ、育児ストレスへの対処法として音楽活動が有効である可能性が示されている。本邦では、育児中の母親を対象を限定した音楽活動のリラックス効果に関する量的研究は認められず、この点でも意義のある研究と評価された。

以上より、本論文は、育児ストレス・自我状態・母性意識・自尊感情・自己効力感について包括的に検討しており、その点で独創的であるとの結論に至った。また、育児中の母親を対象に音楽活動のストレス軽減効果を検討した論文は本邦には見当たらず、この点からも博士論文として意義があると評価された。これらの観点から、主査1名、副査2名全員が、本論文は博士論文として合格であるとの結論に至った。

3. 専攻委員会による審査

2016年2月15日9:00より博士論文発表会にて島澤氏による口頭発表が行われ、委員会構成教員による質疑応答が行われた。口頭発表の内容と質疑応答の状況を踏まえ、同日の専攻委員会において島澤氏の博士論文について協議したところ、合格との結論を得た。

4. 大学院研究科委員会による審査

2016年3月1日における大学院研究科委員会において、以上の審査経緯を学位審査委員長が報告した。その報告内容を審議し、本論文は博士論文(学術)として合格との結論が全員の賛成をもって承認された。